

三年生の新会長

金重剛二作 吉崎正巳絵





子どもの文学

三年生の新会長

NDC 913 偕成社 166p. 23cm 1978年

1978年4月 1刷

1978年7月 2刷

著者	かね 金	しげ 重	ごう 剛	じ 二
発行者	今	村	廣	

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京5—1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

3393-626200-0904

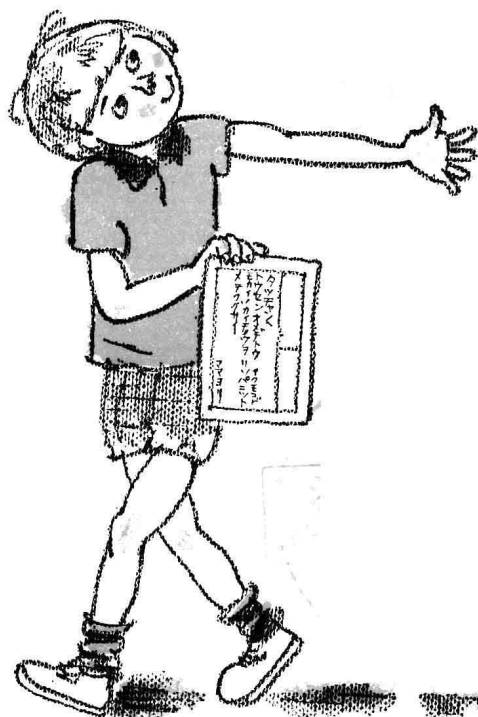
Printed in Japan

©金重剛二 吉崎正巳 1978



三年生の新会長

金重剛二作 吉崎正巳 絵



MASU

● はじめに

おっちょこちょいで、きかんぼう。

ぬけめがなくて、あつかましい。

けれど、にくめない、たっちゃん。

おかっぱあたまをふりふり、たっちゃん

は上級生^{じょうきゅうせい}たちのうちをまわります。

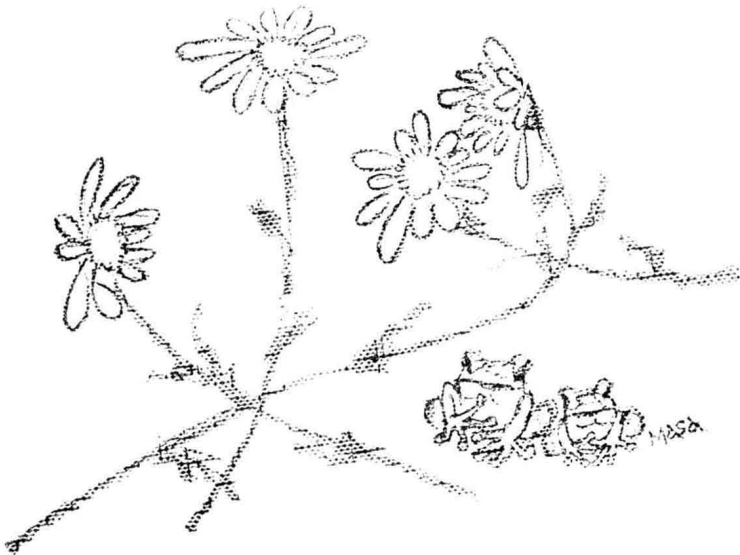
みんなにめいわくがられようと、きらわ

れようと、なんのその。いそがしすぎて、

ひとの気^きもちなど考^{かんが}えていられません。

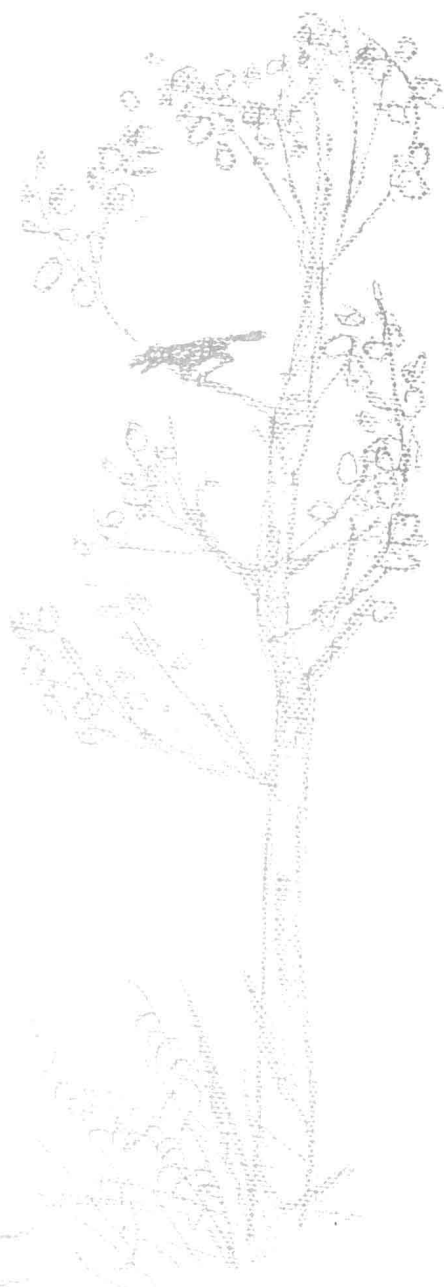
ちびっこ悪魔^{あくま}となった、たっちゃんは、

子ども会の会長^{かいちょう}なのです。



三年生の新会長／もくじ

- 1 おとうさんは化石人間にさせられる 8
- 2 脳の悩みそはたいせつにせよ 17
- 3 祝電は投票のまえにかぎる 30
- 4 じょうだんはほどほどにしよう 40



14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
あとがき	おみこしはかいだんをおりる	チョコレート号 ごう はもどらない	ぼくはにげない	大学生は残念賞 だいがくせい ざんねんしょう をもらってかえる	小悪魔 こあくま はひとりでいそがしがる	ヘリコプターは近所 きんじょ めいわく	会長 かいちょう はなんでも知 し っている	低空飛行 ていくう ひこう はけがのもと	おかあさんはおどろかない
166	156	132	117	109	100	91	79	63	52





作者・金重 剛二

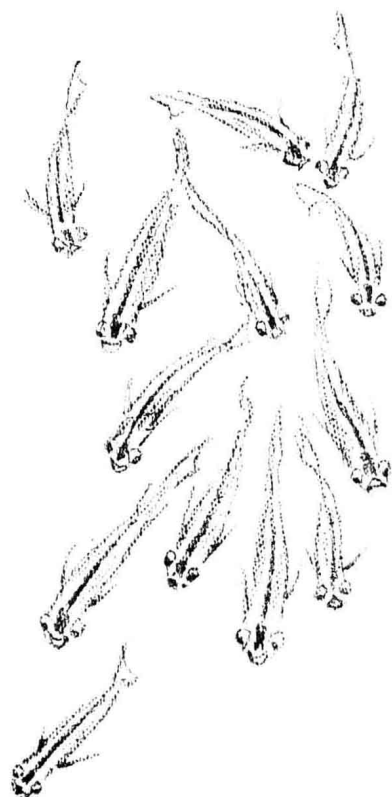
1943年、山口県徳山市に生まれる。明治大学卒業。日本児童文学者協会会員。著書に『ドリーム77』（理論社）『銀河へのエレベーター』（理論社）『とおせんぼタワー』（理論社）『ぼくが消えた日』（偕成社）などがある。
住所／神奈川県横浜市港北区日吉本町926

画家・吉崎 正巳

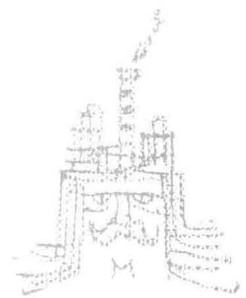
1914年、山口県光市に生まれる。35年独立美術展初入選。主な作品に絵本『こぐまのぼうけん』（ポプラ社）『ざりがに』（福音館書店）、さし絵に『平家物語』（学燈社）などがある。第一美術協会常任委員。児童出版美術家連盟会員。住所／東京都練馬区練馬2-31-2

金重剛二

三年生の新会長



1 おとうさんは化石人間にさせられる



町はずれにある石油コンビナートは、銀色にかがやくタンクや、パイプ、えんとつなどをかかえて、まるでこの町の支配者みたいなかおをしている。

ぼくのおとうさんは、このコンビナートをもっている石油会社の社員なのだ。本社は山口県ぐちけんのこの町にあって、おとうさんは、五か月まえまで東京支社ではたらいっていた。

「おめでとうございます。本社に転勤できるんですもの、うらやましいわ。」

と、西野のお婆さんが、ぼくのおかあさんにいった。

このお婆さんのむすこ、西野勇一は、おなじ東京支社の寮にいて、ぼくたちはいっしょに学習塾へかよっていた。

「ありがとうございます。本社勤務といったって、わずかのあいだなんですよ。たぶん三

年くらいだろうって。」

「まあ、そうおっしゃらずに。空気のいいところに、ずっといらっしゃいな。」

西野のお婆さんが、いくら、いなかでゆっくりしている、といったって、そうゆっくりしていただけるかどうか……。会社のえらい人が、東京にもどれといったら、すぐにでもかえってこなければならぬ。

おかあさんは、東京をはなれるのが、いやでしかたがなかったのだ。理由は、ぼくたちの勉強がひどくおくれるだろうということ。

いなかにつつまつて学校はあるだろうが、ぼくや弟の実がかよっていたような、すごいマンモス塾があるとは思えなかったからだ。おかあさんは、学校よりも塾のほうをしばいしていた。

「康志のことも、すこしは考えてやってくださいよ。来年は六年生ですよ。さ来年は中学にすすむんじゃないませんか。」

そういつて、おかあさんは、なんどもおとうさんにつめよった。

「来年六年生なら、さ来年は中学生だよな。それがどうした？」

おとうさんには、おかあさんのいおうとしてゐることが、さっぱりわからないのではない。そのことについて、わるあがきしてもしかたがない、と思つてゐるだけだ。

「まあ、どうした、ですって？ いなかには、ろくな中学校はないにきまっています。たとえ、運よくそれまでに東京へもどつてこられても、もう手おくれですわ。いい中学校にはいらないければ……」

「いい高校こうこうにはいれない。いい高校にはいれないければ……」

おとうさんが、すましてそういうと、おかあさんは、怒りいかで顔かおをまっかにする。そうして、その怒りいかがとおりで、こんどは、なさけない顔かおをしておとうさんにたのむのだ。「ほかの人にかわつてもらうことはできないんですか？ 子どもさんのいない人とか、まだ、子どもさんが学校にあがつていない人とか……」

「なんかいいつたらいいんだ。だめだといったろう。渡辺わたなべにしても田中たなかにしても、本社ほんしやにいつてるじゃないか。あいつらだって、子どもをむこうの学校に転校てんこうさせたんだ。」

「そうねえ……、しかたがないんですよねえ……」

おかあさんのあきらめのわるさといったらない。四月になつて、ぼくたちの住すんでいた

へやをすっかりかたづけ、あした東京をはなれるという日も、まだおとうさんにこぼして
いた。

おとうさんがあいてにしないでいると、そばから実がいった。

「いい方法がないこともないよ。」

そのことばに、すわっていたおかあさんは、まるで神さまでもあおぎみるように、実の
顔を見た。

「なんなの？ いい方法って。」

おぼれるもの、わらをもつかむ、という感じだ。

「かんたんなことさ。ぼくたちは、このままここにのこるんだよ。」

「と、いうと？」

ふりかえったおとうさんは、そういつてからつぶやいた。

「と、いうことだな……。父親ってのは孤独なものだよ。妻や子どもたちからみはなされ、
ひとりさびしく転勤していかなくはならない。」

おとうさんは英雄ぶって、ひとりでじぶんをかわいそうがり、それから、いきなり顔を

あげていった。

「ところが、さんねんなことに、そうはいかないんだ。おまえたちのぞむとおりに、ものごとははこばない。現実^{げんじつ}はきびしいんだよ。おとうさんは、どこまでもおまえたちといっしょだ。地球^{ちきゅう}のはてまでもついていく。」

演説調^{えんげつちょう}になつていたが、興奮^{こうふん}したおとうさんは、すっかり感^{かん}ちがいしている。ついでくのはこっちなのだ。

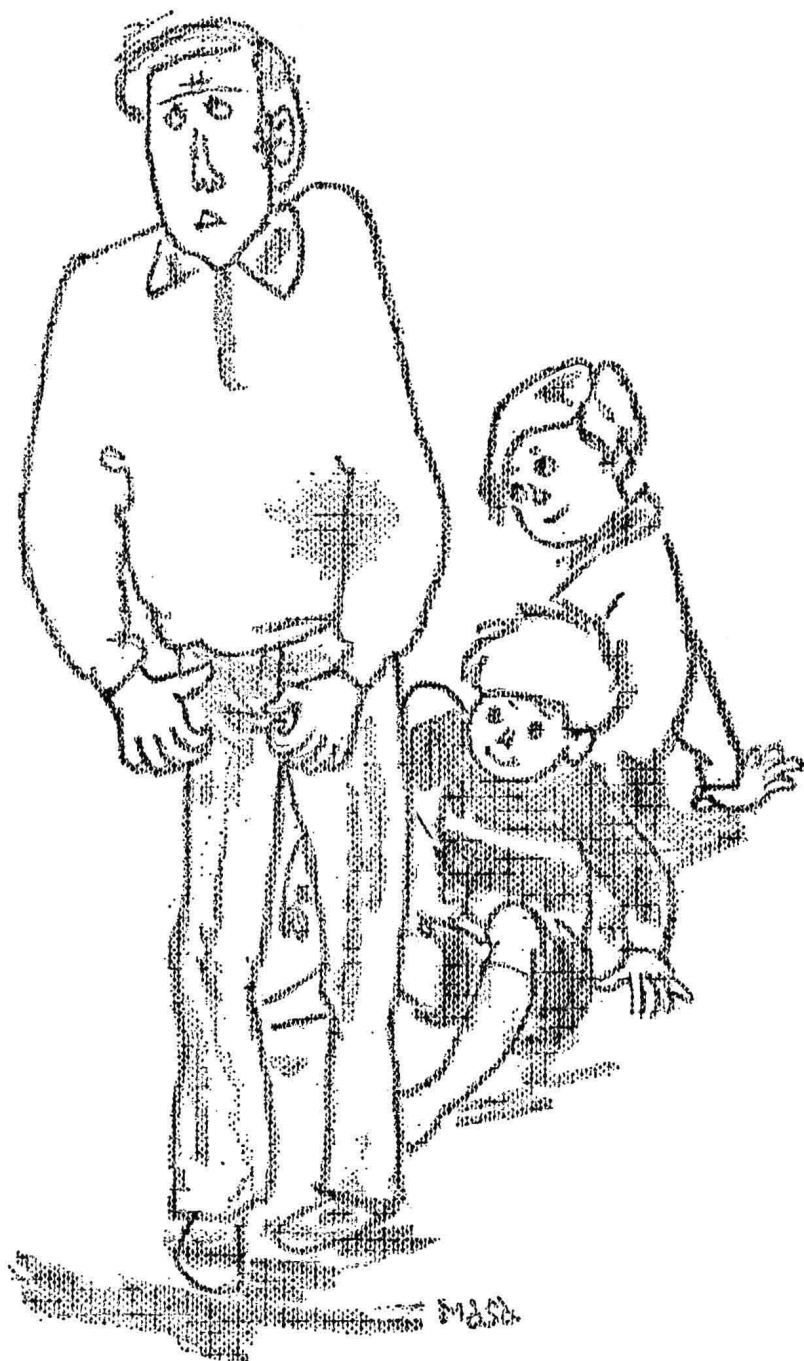
「と、いうのはな。」

おとうさんは、実^{みの}の顔^{かお}をみながらいった。

「おとうさんが転勤^{てんきん}すると、このへやはあけわたさなければならぬ。すぐあとに、ほかの人がはいるからな。だから、東京^{とうきょう}に家^{いえ}か、へやをおまえたたちのために借^かりることになる。お金^{かね}がかかりすぎる。で、だめ。しかたがないから、おとうさんは、おまえたちをまきぞえにしてつれていく。」

「なっとく」

ほんと実^{みの}は、うなずいた。



実は、おかあさんをなぐさめるために、あんなことをいったが、ほんとうは、ぼくとおなじ気もちなのだ。東京をはなれるのが、うれしくてたまらないのだった。

実の場合は、塾がひとつだったから、まだしもだが、ぼくなどは週三日、実とおなじ塾にいき、のこりの三日は、べつの塾にいかされていた。勉強地獄の血の池で、生きているのがやっと、という毎日だったのだ。

でも、ぼくには、まだ日曜日があつた。それだけでもすくわれた。

ぼくたちのクラスの生徒のなかには、塾をかけもちでまわったうえ、日曜日にはテスト専門の塾にいく、というものさえめずらしくなかった。

ぼくが、やっとこさ生きているという感じなら、そういう連中は、死んでいるのと同じくらいかわらないということになるだろう。

おとうさんの転勤がきまったのは、おかあさんが、「実も、もう四年生になるんだから、ふたつくらいの塾にはかよえるわね。」といていたやさきだった。だから、実のよろこびもひとしおというもの――。

ぼくたちは、本社のある町に塾がないことをいのった。

ぼくたちの気もちも、おとうさんにはつうじていたらしい。

ある日、おとうさんは、ぼくたちにこっそり、こういったのだ。

「おまえたち、こんどは、のびのびやれるぞ。」

おかあさんにはわかったが、ぼくたちは、おとうさんとよろこびあった。

それというのも、おとうさんは、おかあさんが西野^{にしの}のおばさんと競争^{きようそう}しているのを、いつも、にがにがしく思っていたからだった。

